

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 25 日現在

機関番号：32618

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22720078

研究課題名(和文) 佐藤春夫肉筆資料の文献学的研究

研究課題名(英文) A Philological Study on Haruo Sato's Handwritten Materials

研究代表者

河野 龍也 (KONO, TATSUYA)

実践女子大学・文学部・准教授

研究者番号：20511827

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円、(間接経費) 870,000円

研究成果の概要(和文)：佐藤春夫は近年、「アジア文学」研究の立場から注目を集めているが、基礎研究の不足から全体像のつかみにくい作家となっている。国際研究の場における情報共有のために、一次資料を整理することが急務である。そこで本研究では、未調査のままであった春夫の書簡やノートの翻刻を行うとともに、春夫のアジア紀行に関する詳註を作成することで、彼のアジア理解と、文学者としてのアイデンティティ形成の淵源について考察した。

研究成果の概要(英文)：Haruo Sato attracts attention from the situation of the "Asian literature" study in late years, but it is still hard to overview his entire image because of the lack of fundamental researches. For sharing information in the stage of the international study, it is urgent business to organize primary materials. Therefore, in this study, by making transcripts of his letters and notebooks which had not been investigated, and by making detailed commentary on his travel writings of Asia, I conducted the research on the origin of his Asia understanding and his identity formation as a literary person.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：国際情報交換 近代文学 中国 台湾 文献学 ナショナル・アイデンティティ 日本文学 戦争詩

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究分野間における春夫像の落差

90年代以降、佐藤春夫は中国文学研究や植民地文学研究の分野で注目を集めている。春夫は1920年に植民地台湾および共同租界の福建省廈門に旅行し、数多くの紀行文や創作を残した。中国文学者の藤井省三がこれを取り上げ、春夫をアジアの「抵抗ナショナリズム」に対するよき理解者として紹介したことがきっかけである(『台湾文学この百年』1998)。だが、日本近代文学研究における春夫への評価は厳しく、戦争詩の多作に見られるように、日本の対外膨張政策に対する春夫の無批判な姿勢を問題視する論調が支配的であった。

こうした研究分野間の齟齬は、作家の広汎な業績のうち、特定の要素だけを取り出してその可否を論じる傾向によるものであった。本研究の代表者は、この傾向を生んだ原因が学際的な情報共有の不足にあると考え、国際学会等の場で研究交流を進めてきた。

(2) 基礎研究の立ち遅れ

1920年代の台湾・中国に関する文献資料を調査する中で浮かび上がったのは、そもそも共有されるべき一次資料が、所在情報を含めて余りにも未整備のままであり、そのことが議論の抽象化を生む大きな原因になっているという春夫研究の現状である。

例えば2009年、佐藤春夫が疎開先の信州佐久で使用した詩の創作手帖が発見された。その中には未発表詩の他、おびただしい推敲の跡を含んだ詩の草稿が記されていた。同様の手帖は新宮市立佐藤春夫記念館にも多数所蔵されているが、その解読作業は膨大な労力と時間を要するためほとんど進捗していない。また、春夫が描いた油絵が、いくつかの公共機関や個人の手で保管されていることも分かってきた。こうした一次資料の総合的調査を進め、多くの研究者がアクセスできる環境を整える必要があった。

2. 研究の目的

日本近代文学におけるナショナル・アイデンティティの現れ方について明らかにするのが本研究の究極的な目標である。佐藤春夫はこの問題を考えるにあたって極めて示唆的な存在である。

大正デモクラシー期の作家に共有されたりベラルな発想に、世界人(コスモポリタン)という自己規定がある。だが、それは主体的な葛藤を通じて獲得されたものではなく、西洋由来の外発的な思想であったために、国民国家幻想の無自覚な温床にもなった。

しかし、春夫の場合、彼は詩と散文という文学ジャンルの使い分けを軸に、日本人と世界人という二つの顔を演じ分けていた点で例外的と言える。もちろん、春夫自身

も数多くの戦争詩を書いたという事実に注目すれば、他の大正作家と同様の経路をたどったと言えなくはない。が、自らのアイデンティティを文学ジャンルで表現するという自覚的・戦略的な振る舞い方は注目に値するだろう。本研究は、春夫の文学者としての意識と、ナショナル・アイデンティティとの交錯を、具体的な文献調査に基づいて明らかにしようとするものである。

3. 研究の方法

(1) 佐藤春夫関連資料の整理

佐藤春夫のノート・原稿類から絵画作品にいたる肉筆資料は、遺族や関係者によって、複数の公共機関に寄贈されている。だが、分散収集のため調査はかなり遅れており、内容の解読はもとよりリストの公開すら手つかずの状態であった。春夫肉筆資料のリストは、一部については新宮市立佐藤春夫記念館作成のものが存在するが、これに新情報を加え、より詳細化することを目指す。新資料が発見される一方、所蔵機関によっては散逸の危険性を抱えたケースも存在し、資料保全の観点からも所在情報を明確に把握する必要がある。後日の公開に備え、所在情報や資料の詳細についての情報を整理する。

(2) 書簡・創作手帖の読解・翻刻

佐藤春夫自筆の書簡類、また春夫宛ての書簡類の整理と解読を通じて、春夫をめぐる文壇ネットワークの解明を目指す。また、貴重性の高い詩の創作手帖について、推敲過程の解読作業を進めていく。これにより、活字のみを手がかりに語られてきた春夫像を、作品生成の現場から捉え直そうとするものである。

(3) アジア紀行関連作の詳註作成

春夫のナショナル・アイデンティティ形成を考える上で欠かせない台湾・中国紀行(1920年)について、現地調査や関係者からの聞き取り、写真・文献資料の網羅的蒐集によってその実態を明らかにする。成果は段階的に活字化し、また国際学会等で積極的に成果を公表することで、海外の研究者との対話と情報交換を行う。

4. 研究成果

(1) 平成22年度の成果

平成22年度は、8月に和歌山県新宮市の佐藤春夫記念館で所蔵資料(おもに創作ノート)の網羅的な調査を行った。戦争詩を多く発表した春夫にとって、戦後文壇への復帰は極めて困難な課題であったが、疎開者として自己の批評的立場を回復していくプロセスがある。このことを、創作ノートも含めた戦後詩の推移稿を検討することで、ほぼ裏付けることができた。収集した情報については、リストを作成し、主要なものについては翻刻

を進めた。また本研究では、近代文学におけるナショナル・アイデンティティの形成過程を跡付ける目的から、春夫の台湾・福建旅行の周辺資料にも注目しているが、本年度はこの方面でも特に大きな収穫があった。まず8月に台北を、9月に廈門を、2月に台南・高雄をそれぞれ訪問し、現地の郷土史家や関係者遺族に聞き取り調査を行った。その際、国内では入手困難な文献資料を多く目にする事ができ、春夫の初の外国体験について、数多くの事実を明らかにすることができた。そこで『南方紀行』の詳註作成の計画を立て、本年度中には民国初期の軍閥割拠状況に関する春夫の鋭い観察眼と盲点について論文で考察した。中国旅行は大正中期に流行し、いわゆる“支那趣味”熱を日本の文壇に吹き込んだが、春夫の旅行は他の文学者と異なり、中国人の案内で現地の生活空間にもぐり込むという、当時としては異例の中国旅行であった。この体験の特異性を数多くの同時代資料で裏付け、春夫が「日本人」としての自己省察を深めていく様相に迫ることができた。

(2)平成 23 年度の成果

平成 23 年度は、2本の論文、2回の国際学会における発表を通じて本研究の成果を公表することができた。ここで取り上げた研究テーマは、春夫におけるアジア体験・アジア表象の分析、春夫における疎開体験の意義づけ、の2点に集約される。は、平成22年の台湾南部における現地調査をふまえ、春夫の代表作の一つ「女誠扇綺譚」の作品世界に関して、註釈的なアプローチを提示したものである。国内で閲覧困難な戦前台湾での研究の蓄積を取り上げる契機ともなった。また、同じく春夫の台湾旅行の成果である「日月潭に遊ぶ記」と「旅びと」とを比較することで、異国の風光をガイドブックのように紹介する平板な旅行記的記述から、“感傷的な私”の造形へと創作の中心をシフトさせて行く春夫の私小説的転回の具体相が確認できた。以上は、台湾中国関連作品の草稿研究を行う上での基礎研究を企図したものである。次に に関しては、春夫が疎開時に用いていた創作ノートの全容を翻刻紹介した。これまでの調査で、新宮の佐藤春夫記念館には同時期に春夫が使用していた別種のノートが収蔵されていることも判明しており、戦争詩人としての春夫が、戦後文壇に復帰する局面でいかに心をくだいたか、その表現戦略を詳細に跡づけることが可能になった。一方、草稿類の整理、および佐藤春夫あて書簡類の調査も進めた。中でも、春夫の父・豊太郎が故郷新宮から春夫に宛てて送った書簡の中には、直接春夫の創作に活かされたとみられる素材が多数存在している。春夫文学の一つのテーマである「望郷の念」を側面から裏付けるものであり、素材研究の点からも注目される資料群である。その完全なりリストを作成し、年代別に解説作業を行った。

(3)平成 24 年度の成果

平成 24 年度は、8月中旬にアメリカ・スタンフォード大学で蒋介石日記の調査を行い、同下旬には台北で文献調査、台南で都市調査を行った。この調査結果をもとに、本年度は2本の論文、1回の国際学会における発表を通じて研究成果を公表することができた。いずれも佐藤春夫におけるアジア体験・アジア表象を分析したものである。

研究論文の一つは、大正9(1920)年の中国における春夫の行動を可能な限り再現しようとしたもの。中国全土でも先進的な社会主義政策をとっていた軍閥・陳炯明による近代的な都市改造に春夫が期待を抱き、やがて幻滅することで春夫の中国古典趣味が成立したプロセスを明らかにした。また別の論文では、同じ旅行に材をとった春夫の代表作「女誠扇綺譚」を取り上げた。そこでは、作品の舞台である台南の都市空間が持つ歴史的な意味を、現地の郷土史研究の成果を活用しながら復元することに努め、これを作中の表現と照合することで、衰頹した港の記憶に被支配者としての鬱屈を紛らせる作中の台湾漢詩人の造型が、当時の台湾知識層の実情をかなり忠実に伝えたものであることを明示することができた。

一方、学会発表では、春夫の中国旅行が内戦時代の中国の最前線に行く危険なものであったことを指摘。その根拠として、同時期同地方で連絡員を務めていた蒋介石の日記にも触れた。さらに春夫が滞在した福建省の廈門は、当時激しい排日運動のさなかにあり、そのような場所を日本人として単独で旅行した経験をつづった『南方紀行』は他に類例を見ない貴重な中国旅行記であることを指摘。またその記述は、民間交易港として繁栄した廈門の都市構造を忠実に反映したものであることにも言及し、春夫の紀行文における空間把握の特色をも明らかにした。

以上は、現在残された春夫関連の書簡や草稿、絵画類を研究する中で、その註釈情報を整備する必要から取り組んだものである。

(4)平成 25 年度の成果

平成 25 年度は3件の出張を行った。9月12日～15日の台北出張では、国立台湾図書館で旧総督府蔵書の閲覧を行い、また国立台湾大学で日本時代の新聞資料の調査を行った。さらに台北市内在住の台南郷土史研究家を訪問し、春夫作品の舞台となった台南の港町文化についての貴重な教示と資料提供を受けた。次に9月17日～19日の新宮出張では、佐藤春夫記念館を訪ね、創作ノート・原稿を中心とする所蔵資料の調査を行った。また、春夫歿後50年を迎える平成26年度に、記念講演会および記念出版を行う計画を立て、その具体化について協議した。そして12月27日～28日の神戸出張では、大正9年に春夫を台湾に招いた級友の遺族を訪問し、同

家所蔵の写真資料の提供を受け、またインタビューを行った。その内容については年度中にまとめ、活字公開することもできた。

以上のように、本年度の研究では、春夫の台湾・福建紀行に関する調査に大きな進展があった。その中で、台湾郷土史研究家や春夫関係者遺族と対話でき、良好な関係が築けたことは、今後の研究にとって大きな力となる。ほかに研究成果としては、上記紀行に関する論文・註釈・インタビュー記事を都合4本発表することができた。春夫にとって重要な転機となった台湾・福建紀行中の知られざる行動を、聞き取りと新聞記事調査から明らかにできたことは顕著な収穫である。一方、春夫宛書簡に関しては、リストの作成が終了し、重要人物の書簡から解読を開始した。また、この調査中、春夫の戦後文壇への復帰がいかに果たされたかを知るためには重要な春夫自筆書簡約60通が出現した。その解読作業を終え、公開に向けて調整を開始した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計10件)

河野龍也、佐藤春夫、台湾で居候になる—インタビュー—東熙市一家の記憶から—、実践女子大学文芸資料研究所年報、査読無、第33号、2014、278-301

河野龍也、佐藤春夫の台湾滞在に関する新事実—台湾酔仙閣と台北音楽会のこと—、実践国文学、査読無、第85号、2014、33-42

河野龍也、佐藤春夫『南方紀行』の中国近代(三)—東熙市と鄭享綬—、実践国文学、査読無、第84号、2013、50-67

河野龍也、佐藤春夫『南方紀行』の路地裏世界—廈門租界と煙草商戦の「愛国」、アジア遊学(戦間期東アジアの日本語文学)、査読無、167号、2013、150-160

河野龍也、佐藤春夫「女誠扇綺譚」と港の記憶—再説・禿頭港と酔仙閣、実践女子大学文芸資料研究所年報、査読無、第32号、2013、270-291

河野龍也、歴史と文学のはざままで—佐藤春夫『南方紀行』と民国初期軍閥動向—、日語教学的本土化研究—2011年度上海外国語大学日本学国際論壇紀念文集、査読有、2012、353-357

河野龍也、佐藤春夫『南方紀行』の中国近代(二)—漳州訪問先のこと—、実践国文学、査読無、第82号、2012、26-45

河野龍也、新資料・佐藤春夫創作ノート(翻刻)—信州佐久・疎開生活の一端—、実践女子大学文学部紀要、査読無、第54集、2012、1-9

http://ci.nii.ac.jp/els/110008915770.pdf?id=ART0009874025&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1402605747&cp=

河野龍也、消えない足跡を求めて—台南

酔仙閣の佐藤春夫—、実践国文学、査読無、第80号、2011、69-84

http://ci.nii.ac.jp/els/110008729437.pdf?id=ART0009805854&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1402605695&cp=

河野龍也、佐藤春夫『南方紀行』の中国近代(一)—作家が見た軍閥割拠の時代—、実践国文学、査読無、第79号、2011、43-60

http://ci.nii.ac.jp/els/110008434397.pdf?id=ART0009679798&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1402605606&cp=

〔学会発表〕(計3件)

河野龍也、佐藤春夫『南方紀行』と煙草商戦の「愛国」、国際シンポジウム・戦間期東アジアにおける日本語文学1920～1945、2012年9月9日、京都龍谷ミュージアム

河野龍也、歴史と文学のはざままで—佐藤春夫『南方紀行』と民国初期軍閥動向—、日語教学的本土化研究—2011年度上海外国語大学日本学国際論壇、2011年11月19日、上海外国語大学

河野龍也、紀行から批評へ—佐藤春夫が台湾を描くとき—、「日本文学中的台湾」国際学術研究会(招待講演)、2011年10月7日、中央研究院(台北)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

河野 龍也 (KONO TATSUYA)

実践女子大学・文学部・准教授

研究者番号：20511827